

日本競馬と「第二の人生」

クリストフ・ルメール (騎手)

日本の競馬界で数々のタイトルを獲得し、
記録を塗り替えてきたフランス人ジョッキー、クリストフ・ルメール。
母国で成功を収めるも、競馬への情熱を失いかけていた彼は、旺盛な好奇心で海を渡り、
遠く離れた日本のターフで再び馬と走る喜びを取り戻した。



2018年ジャパンカップ (G I) でアーモンドアイに
騎乗したルメール騎手。芝2400メートルの世界レコ
ードで優勝を果たした。写真＝アフロ

——馬との出会いを教えてください。騎手にな
りたいと思ったのはいつ頃からですか？
ルメール 僕の出身はフランス・パリ郊外の街、
シャンティイ。歴史あるシャンティイ競馬場が
あることで知られています。生まれたのは競馬
のトレーニングセンターの向かいにある病院で、
部屋の窓から調教風景が見えるような場所でした。
父は障害レースで活躍するジョッキーでした。
父は、文字通り「生まれた時」から馬と競馬
に囲まれた環境で育ちました。

父に反対されてもあきらめなかった
ジョッキーになる夢

初めてポニーの背中に乗ったのは、確か五歳
ぐらいの時じゃないかな。子どもの頃から競馬
場に連れていってもらい、父のレースを応援し
ていたので「大人になったらジョッキーになり
たい」と夢見るようになったのは、幼い僕に
とってごく自然なことでした。

——ところが、お父さんはルメールさんが騎手
を目指すことに反対だったそうですね。

ルメール 一四歳で競馬学校に入学したかった
のですが、父は「お前は子どもの頃から、好き
な物を買ってもらい、好きな服を着て、苦労せ
ずに育ったので、競馬の世界で戦えるメンタル
の強さがない」と許してくれませんでした。

父の時代、騎手の生活は、今よりずっと厳し
かった。プロのジョッキーとして、この世界の
厳しさを知る父は、息子に自分と同じような苦
労をさせたくなかったのだと思います。

それでも、僕はジョッキーになる夢をあきら
められず、絶対に騎手として成功できると信じ
ていた。そして、その夢を叶えるためにはどん
な努力もいとわないうちで、高校に
通いながらアマチュア・ジョッキーの試験を受
けました。

合格してからは、学校に通いながら週末はア
マチュアのレースに騎乗して、少しずつ経験を

C H R I S T O P H E L E M A I R E



Part 1 競馬の力、物語の力

馬が走り、人が語る。そこに生まれる物語は、
単なる記録ではなく、祈りや夢の断片だ。走る者、書く者、語る者——。
それぞれの視点が競馬の奥にある「生きる力」を照らす。



”馬と走る喜びを、もう一度、純粋に感じられるようになった“

クリストフ・ルメール

騎手。1979年、フランス生まれ。99年にフランスでデビューし、数多くのヨーロッパのビッグレースを制覇。日本では2002年に短期免許で初騎乗。05年有馬記念をハーツクライで制しJRA・G I初勝利を挙げる。15年には日本の通年免許を取得してJRAの所属となる。18年には215勝を挙げJRA年間最多勝記録を更新。25年にはJRA通算2000勝を達成した。

積み重ね、バカロレア（フランスの高校卒業資格試験）に合格した後、父の許しも得て、念願のプロのジョッキーになりました。

——フランスでプロとしてデビューしたのが一九九九年。そのわずか三年後、日本のレースに騎乗しています。

ルメール 僕はもとも旅が大好きで、好奇心が旺盛なタイプ。それに、若い時はできるだけたくさん自分の知らない国や文化に触れることが自分を成長させ、それがジョッキーとしての「強さ」にもつながると信じていました。デビューしたての新人だった頃から、アメリカや中東、インドなど、フランス以外の国のレースにも積極的に挑戦していました。

そんな頃、当時、外国人ジョッキーとして初めて日本の競馬の短期免許を取得し、日本のレ

ースに騎乗していた同じフランス人騎手のオリビエ・ペリエから、日本の競馬、日本の文化、そして日本人たちの素晴らしさを聞き、強い興味を抱くようになったんです。

もちろん、僕たちヨーロッパ人にとって日本は遠く離れた異国の地でエキゾチックな存在でもある。そんな日本にもレベルの高い競馬があつて、自分が生まれ育ったフランスとはまったく異なる文化があるのなら、日本のレースに騎乗することは貴重な経験になるはずだと、好奇心が刺激されたのだと思います。

——日本での初騎乗のことを覚えていますか？

ルメール もちろんです。日本の短期免許を得て、初めて騎乗したのは二〇〇二年一二月の東京競馬場でした。事前にエージェントから「東京競馬場は、東京競馬場や阪神、京都と比べる

とちよつと田舎ですよ」と聞いていたので、つまり僕がフランスで「田舎」という言葉から想像する、シヨボい競馬場だと思い込んでいた。そうしたら、街中にある立派な競馬場だったのでとてもビックリしました（笑）。

もちろん、競馬そのもののレベルも高かったですし、何よりも運営が素晴らしくて、すべてがスケジュール通りに進んでいく。ラテン気質で少しルーズなところがあるフランスとの違いにも驚いたことを覚えています。

——ほかに、フランスと日本の競馬の大きな違いは何ですか？

ルメール 一番の違いは「スピード」ですね。自然の地形をそのまま活かした競馬場が多いフランスやヨーロッパと比べて、市街地に作られた競馬場が多い日本は、コースが人工的なのでス

この続きは本誌でどうぞ！